猫の年賀状

澄水

体の中にまで響く、大きな破裂音によって起こされた。家の外から聞こえるその音は、中にいるにも関わらず、耳に響いてきた。

窓の外には日の光はなく、暗い夜空が見えた。

この暗い夜空に、一筋の光が登っていった。次の瞬間には爆ぜ、緑の火の粉を花開くような形に散らしていった。

少し遅れて破裂音が体の中まで響いてきた。

時計に目をやると、針は十二時を指していた。当然、午前零時のことだ。日付が変わったという事を示す。

茶色の炬燵布団に下半身を入れたまま、祝いの花火を眺めていた。この祝いの意味を思い、溜息を零した。

「寝過ごした。年越しそば食べそびれた……」

体を起こしながら一人呟いた。当然返事はない。下半身は炬燵布団に入れられたままであった。そのためか、体が寒さを感じることはない。

炬燵の中は全身で入っても問題ないほどのスペースがある。体感的には厚いほどだが、寒々しかった。

十畳の和室には、テレビと炬燵があるのみ。テレビは、人でごった返した神社の様子を映し出していた。

炬燵の上にはお菓子の詰め合わせの袋、薩摩芋とカップラーメンが一つ。カップラーメンを手にとっては見たが、あまり食べる気が起こらず、そのまま置いた。

花火の音は、空になった腹の中でもよく響いていた。

厚手のコートを羽織って、国道沿いをゆっくりと歩いていた。道路は真っ白になっていた。一歩一歩足を進める度に、足跡が残った。

今は降っていないため、傘は差していない。

花火の音はようやく止んだところだった。携帯電話のディスプレイの端には、十二時四十分と表示されていた。

腹の中は満たされていた。体は温まっていた。

年が明けてからの年越しそばになった。それも中華そばである。

ラーメンで年越しそばを済ませる人は多いだろうが、個人的にはこれを最後の手段だと思っている。しかし、年を越してしまった事と中華屋が近かったことから面倒と感じ、この選択に至った。

家の近くに着いた時だった。

隣の家の玄関先に、白い猫の姿が見えた。白猫ではない。灰色に黒の模様の入った体。華奢な体を覆う体毛に雪がまとわりついているようだった。

家の壁には、不動産屋の看板。「空き家」の文字。

「犬は人に付き猫は家に付く、だっけか……」

ペットは飼った事がないため詳しくは知らないが、そのような事を聞いた事があった。
少し前に、かつての住人の息子たちが遺産相続でもめていた。夜中に隣で怒鳴り合いを始められたせいで、寝られなかったのを覚えている。
話が相当荒れていた。相当の物音がしていた。意味は違うが、まさに先程の花火の音のようだった。
仲裁に入ろうとしたお人よしのご近所さんは鼻血を出して帰ってきた。
猫は勝手口の方へと向かった。当然、勝手口は閉まったままだ。
今度は、ジャンプして、窓に乗ろうとしていた。窓が開いているはずもない。
しばらく、窓から入ろうとする様子を眺めていた。再び降り始めた雪の中で、灰色の体が時と共に白猫へと近づいていくような気がした。
気づけば空き家の敷地に入りこみ、猫を抱えていた。

体が濡れるのを嫌がり、乾かすのも拒み、かの有名な歌の如く炬燵の中で丸くなっていた。炬燵に足を入れても反応がない辺り、人には慣れているようだった。
なからないなりにも頭を撫でつつ、携帯電話で丑デザインの年賀メールを送信した。メールで済ませているため、年賀状は書いていない。
「さて、何なら食べられるんだ？」
立ち上がり、冷蔵庫の扉を開けた。玉葱、人参、卵……。それらがまるで、売れ残りの様に広い冷蔵庫の中に眠っていた。人の背丈ほども無い小さいサイズの冷蔵庫だが、中はとても広く感じられた。
肉も魚も無い。
「確か玉葱は食べさせたらよくなかった気がする……」
何も持たずに扉を閉めた。
溜息を吐きながら炬燵へと戻ると、炬燵の上に置かれた紫色のそれが目に入った。
「よし、焼き芋するか」
数分後、アルミホイルに巻かれた薩摩芋が湯気を出していた。
匂いに気づいたのだろう。炬燵から出てきて、こちらをじっと見ていた。まだ少し濡れた体は、水滴が反射してどことなく白く見えた。
「早く食べて温まれ」
ホイルを外し、半分に割った芋を床に置くと、動く獲物に飛び付くような動作で捕まえた。
人のように紫色の皮を剥く事は当然ながらなく、床に置いて、クリーム色の身を少しずつ食べていった。
そこに突然、炸裂音が鳴った。窓の外を見ると、オレンジの花が夜空に広がっていた。余った花火の処理であろう。
音に反応するように、猫は体を強張らせるように縮こませて窓の方を向いた。震えている様にも見えた。小さくなっていくような気がしてならなかった。
「お前はこの音、苦手か……」
何か大きな音で怖い思い出もしたのだろうか。
炬燵布団をめくってやると、猫は焼き芋を咥えて炬燵の中へと入って行った。中を覗き

込むと、先程と同じように芋を食べていた。
中の熱で体毛が渇いたのか、以前見かけたままの黒模様の入った灰色に戻っていた。先程まであった白さはもうない。
胸の中から湧き上がる何かを感じ、携帯電話を手に取った。電子音と共に一枚の画像が保存それた。
炬燵に足を入れて胡坐をかくと、その上に重みがかかった。
「やっぱりいい写真があるから年賀状でも作ってみるか。年賀メールを送ってないのは……」
親、恩師、友達、昔のクラスメイト……。全て送信済みだ。
ただ、連絡先を知っているが、送っていない人物がいる。隣の家の住人だ。もういない人物に送っても意味はない。だが、その息子達とも知り合いだ。かつて帰省してきたときに話した事もある。連絡先も知っている。
「今年は喪中だから来年にしないとな」
年賀状に張り付けるのを忘れない様、猫が炬燵で芋を食べているこの様子を待ち受けに設定した。
股の上でもぞもぞと動き、炬燵布団をかき分けて、亀のように顔だけが出てきた。こちらを見ながら何度も瞬きをしていた。
「来年の年賀状が楽しみだな」